カシモフ皇国における皇統の変遷

中　村　仁　志

はじめに

13世紀，チンギス汗の孫バトゥを総大将としてモンゴル軍の西方遠征が挙行された。これを契機として成立したキプチャク汗国は，ヴォルガ川の下流にあるサライに都をおき，北東にあるロシアを「タタールのくびき」[1)] のもとにおいた。キプチャク汗は，ロシアの諸公のなかの一人にヤルルィクと呼ばれる勅許を与えて諸公中の第一人者たる大公の地位を認め，彼をつうじて諸公国から貢税をとりたてた。

強盛を誇ったキプチャク汗国は，15世紀になると解体・分裂の過程をたどるようになり，そのなかからカザン汗国，クリミヤ汗国，大オルダ，アストラハン汗国，ノガイ・オルダなどの一群のタタール人国家があらわれた。これらキプチャク汗国を継承する諸勢力とならんで，ロシアの領内にも特異なタタール人勢力が誕生する。15世紀半ばにモスクワ大公によって，オカ川河畔のメシチョーラの地に設立されたカシモフ皇国（カシモフ汗国）[2)] である。

カシモフ皇国は，チンギス汗の血統者を君主としていただくという点では，上記のタタール人国家と共通する特徴をもっていた。一方，カシモフ皇国はロシア国家に従属する存在であり，その住民たちは，主として軍役をもってロシアの君主に仕える勤務タタール人であったという点で，独立の政治勢力である他のタタール人国家とは趣きを異にしていた。

もう一つ，カシモフ皇国の特徴として注目されるべきは，君主の皇統の変化がいちじるしかった点であろう。カシモフ皇国は，カザン汗国の汗家の一員で

あったタタール人皇子カシムを初代の君主としながら，その後，クリミヤ汗国，大オルダなどの汗家の出身者をあいついで君主としてむかえ，目まぐるしく皇統が入れ替わったのである。

カシモフ皇国でおこった，このような頻繁な王朝の交替は，ロシア国家の側からすれば，一つには，その領域内にある地方勢力の首長の家系のすげ替えであり，内政上の案件としての性格をもっていた。その一方で，どの系統のタタール人国家の汗家の出身者をカシモフ皇国の君主の座にすえるのかは，ロシアの対タタール政策と深くかかわる問題であり，タタール人諸勢力との同盟・敵対関係のゆくえを左右する重要な外交課題であった。本稿ではこうした点に留意しつつ，カシモフ皇国の君主の変化をあとづけ，これがロシアとタタール人世界の双方に対してもった意味について考察していく。

１　カザンの血統者

15世紀にキプチャク汗国が解体していくなかで出現したカザン汗国，クリミヤ汗国，大オルダなどの一群のタタール人国家のなかで，カシモフ皇国と特別に深い関係をもっていたのが，カザン汗国である。この点にかんしては，カザン汗国の初代の君主とされるウルク＝ムハンマド（ウルー＝ムハメッド）と彼の一族がたどった足取りを見ていかねばならない。

ウルク＝ムハンマドは，長らくキプチャク汗の地位にあった人物である[3)]。1419年にキプチャク汗の地位について以来，20年近くものあいだ汗位から追われては，その地位を回復するということを断続的に繰り返していた。1437年にクチュク＝ムハンマドに敗れて汗の地位を失ったウルク＝ムハンマドは，一族郎党をひきいてキプチャク汗国の首都サライを去って，ヴォルガ川の中流に移り，そこで都市カザンを拠点とするカザン汗国を築いた[4)]。このウルク＝ムハンマドの息子の一人で，ロシアの地におもむいてカシモフ皇国の初代の支配者となったのが，カシムである[5)]。

一方，ロシアとウルク＝ムハンマドとの関係はどうか。1437年にサライを去ったウルク＝ムハンマドの一族は北方に移動し，その結果，モスクワ大公国の

勢力圏と抵触するようになる。当時のモスクワ大公ヴァシーリー２世は，かつてキプチャク汗時代のウルク＝ムハンマドからヤルルィクを与えられ，大公位を認められたという経験をもっていた。このいきさつからすれば，ヴァシーリー２世にとってウルク＝ムハンマドは旧主にあたる存在であったが，ヴァシーリーは自身の勢力圏に入ってきたウルク＝ムハンマドを，招かれざる客，侵入者とみなし，軍事力をもって斥けようとした。

その結果，手痛い目にあったのは，モスクワ側であった。ヴァシーリー２世は1438年ベリョーフの戦いでウルク＝ムハンマドに敗北し，翌年夏には，タタール軍がモスクワの城下にせまった。さらに1445年のスーズダリの戦いでもモスクワ側は一敗地にまみれる。しかも，このたびはヴァシーリー２世自身が捕らわれの身となるという惨事となったのである。

キプチャク汗時代のウルク＝ムハンマドは，ロシアの宗主ではあったが，モスクワからは遠く隔たったヴォルガ川の下流のサライに座しており，モスクワが日常的にその圧力を感じるような存在ではなかった。しかし，北方に転じてきたウルク＝ムハンマドの一族は，今やロシアの危険な隣人，たてつづけにモスクワ軍を破った恐るべき相手であり，現実の脅威としてロシアの君主をおびやかすようになった。こうした状況下にあってウルク＝ムハンマドの息子の一人であったカシムが配下のタタール人とともにロシアのヴァシーリー２世のもとに来たった。すなわち，ウルク＝ムハンマド一族が分裂して，その一部がロシア側に移ってきたのであり，これは，タタール人の脅威を大幅に減殺させる結果となった。

カシムを初代の君主としてカシモフ皇国が設立されたいきさつについては，大きくいって二つの説が存在する[6)]。一つは，カシムが，父のウルク＝ムハンマドの後継の座をめぐるトラブルが原因で一族のもとを去り，弟のヤクブとともに1440年代後半にロシアに来てヴァシーリー２世に仕えたというものである。カシムはヴァシーリー２世の陣営にあって活躍し，その結果，1450年代にオカ川流域のメシチョールスキー・ゴロドークなる都市（後のカシモフ）とその近郊を所領として与えられ，これがカシモフ皇国設立の端緒を開いたという

説で，19世紀以来通説として唱えられてきた。

これに対し，ウルク＝ムハンマドとヴァシーリー２世の関係をより重要視する説もある。1445年のスーズダリで戦いに勝利したウルク＝ムハンマドは，捕らわれの身となったヴァシーリー２世に対し，身柄を解放するための条件としてロシアの諸都市を分与することを約束させ，その結果，メシチョールスキー・ゴロドークをカシムが得ることになった，と。この場合，カシムは父がおいた礎石の上にみずからの領国を築いたということになろう。

カシモフ皇国設立にかんするどちらの説にせよ，重要なのは，カシムの動向がロシアとタタール勢力との関係のみならず，モスクワ大公国における権力争いのゆくえに影響をおよぼすというかたちで，ロシアの国内事情にとって大きな意義をもったことである。

モスクワ大公ヴァシーリー２世にとりカシムのタタール人部隊の軍事的寄与はきわめて時宜を得た，貴重なものであった。スーズダリの敗戦によって権威を失墜させたヴァシーリー２世は虜囚の身から解放され1445年10月にモスクワに帰って来るが，翌年２月には大公位をめぐって熾烈な争いをつづけていた従兄弟のシェミャーカに捕らえられ失明させられてしまう[7)]。彼の呼び名，ヴァシーリー盲目公（暗闇のヴァシーリー）の由来である。かくしていちじるしい苦境に立たされたヴァシーリー２世にとり，カシムのタタール人部隊がその陣営にくわわったのは大いに力となった。カシムがモスクワの公にとっての譜代の家臣でなかったこと，それどころか主筋にあたる汗家の出であったことを考え合わせると，これは予想外の僥倖であったとさえいえよう。

カシムを兵力にくわえたヴァシーリー２世は，粘り強く戦いをつづけて宿敵シェミャーカとの戦いに勝ち抜き，ついに大公の地位，ひいてはロシアの支配者の座を確固たるものにする。勝者となったヴァシーリー２世は，カシムと彼がひきいるタタール人部隊の軍事的な貢献に応え，彼らに経済的基盤を与えるべくカシモフ皇国を設立させた。

ロシアにおける所領の領有の形式には，個人の功業に対して原則一代限りで与えられる封地と，特定の家門によって代々受け継がれる世襲地の両方があっ

た。タタール人の貴顕によるメシチョーラの領有は，カシムが1469年ころ亡くなった後も，彼一代では終わらなかった。これは，カシムの功績の大きさも，さることながら，ロシアの君主が精強なタタール人騎兵を，その軍事力の一翼として維持せんがためであり，その必要性の前にあっては，正教のロシアの地に，汗家出身の君主以下，イスラーム教を奉じるタタール人たちの国を存続させるのも是とされたのである。

ロシア内における，この特殊なタタール人国家を安定的に継続させていくうえでは，君主の系統が円滑に継承されていくのが重要な前提条件の一つであった。この点，カシムの直系の子孫が存在すれば，君主の地位は世襲によって問題なく受け継がれていったであろうが，カシムの血統は，早くも次の代には断絶してしまう。カシムのあとを襲ってカシモフ皇国の君主となった息子ダニヤルが子孫を残すことなく死亡したためである。

ただ，ウルク＝ムハンマドにはじまりカシム，ダニヤルとつづいた君主一族の血統は途絶えても，カシモフ皇国とカザン汗国との住民のつながりは保たれた。ウルク＝ムハンマドとともに北方に移動してきた人間集団，すなわち汗の血族，ベク，ムルザ，セイトなどの聖俗の貴顕，カザークと呼ばれた平民の戦士階級のタタール人などのうち，主要部分はカザンに，一部はカシモフに分かれはしたが[8)]，それまで運命を共有する一つの集団であった両者のあいだには，縁者，知己としての強い紐帯があったのである。

2　クリミヤの血統者

カシモフ皇国の第２代の君主であったダニヤルが1486年に死亡すると，同国では始祖カシムの血統が途絶えた。この後に，モスクワが新たな王朝の初代の君主とすべく，カシモフ皇国の玉座にすわらせたのが，クリミヤ汗国の汗家の出身のヌル＝デウレットなる人物であった。

ヌル＝デウレットはクリミヤ汗国の建国者ハジー＝ギレイの長男であり，1446年にハジー＝ギレイが没すると，そのあとをついでクリミヤの汗となった。しかし，その後，勃発した汗位争いで弟のメングリ＝ギレイと君主の座をめぐ

って争い，最終的にはオスマン帝国の支援をうけたメングリ＝ギレイに敗れる。その後，ヌル＝デウレットはクリミヤをあとにし，1479年にロシアに到来した。この元クリミヤ汗ヌル＝デウレットと，1486年に死んだカシモフ皇国の君主ダニヤルとは，いかなる関係にあったのか。

キプチャク汗国の流れをくむタタール人諸国の君主の地位にあったのは，いうまでもなくチンギス汗の血を引く汗たちである[9)]。ただし，チンギス汗の血統者ならば誰でも汗となる資格があったわけではない。厳密にいうと，汗となりえたのはチンギス汗の長子であったジョチ（ジュチ）の子孫たちであった。ジョチの次子バトゥによってたてられたキプチャク汗国を含め，ジョチの家門の支配領域とその民は，全体としてジョチのウルス（領地，部衆）と呼ばれ，その域内に成立したタタール人諸国では，ジョチの子孫が汗として君臨したのである[10)]。

ジョチの子孫は，その息子たちの代にいくつかの系統に分岐していくが，そのなかで14世紀末から頭角を現してきたのが，トゥカ・ティムルの系統であった。14世紀末に出てキプチャク汗となって一時的に汗国の勢いを回復させ，中央アジアの雄として有名なティムールと抗争をくりひろげたトフタムィシは，この家系の出である。これと同じく，ダニヤルとヌル＝デウレットもまた，トゥカ・ティムルの子孫であり，ダニヤルの祖父でカザン汗国の創設者のウルク＝ムハンマドとヌル＝デウレットの祖父ギアス＝アディンとは従兄弟の間柄であった[11)]。この点，ダニヤルからヌル＝デウレットへのカシモフ皇国の君主交替は，数多くいたジョチの子孫たちのなかでは，比較的近い血縁者のあいだでおこなわれたと言えよう。

ダニヤルとの血縁的な近さにくわえ，ヌル＝デウレットとカシモフ皇国のタタール人たちとの親和性をうながす要因となったのが，共通の敵の存在であった。すなわち，当時キプチャク汗の直接の後継者をもって任じていた大オルダの君主に対する敵意である。

ダニヤルの祖父にあたるウルク＝ムハンマドは，前章で述べたように，もともとキプチャク汗であった人物で，1437年クチュク＝ムハンマドに追われてキ

プチャク汗国の首都サライをあとにすることを余儀なくされた。その後，北にむかったウルク＝ムハンマドの一族とその郎党たちはカザン汗国を設立する。さらに，彼らのうちの一部はカシムとともにロシアに来たってカシモフ皇国の創設者となった。ウルク＝ムハンマドに随行してカザンとカシモフにあらたな拠点を築いたタタール人たちにとっては，クチュク＝ムハンマドこそは，自分たちを北方に追いやった仇敵であった。その憎いクチュク＝ムハンマドの息子たちこそが，ともに大オルダの汗となったマフムードとアフメト（アフマート）の兄弟であった。

一方，ヌル＝デウレットにしても，大オルダのアフメトに対しては含むところがあった。1466年クリミヤ汗国の汗となったヌル＝デウレットは，当初，アフメトを後ろ盾として頼み，彼に汗位の承認を求めた。こうした手立てによってクリミヤの君主としての地位の安定をはかったのもむなしく，ほどなく弟のメングリ＝ギレイとの汗位争いが勃発する[12)]。10年にわたって骨肉の争いがつづくなか，元来ヌル＝デウレットの後援者であったはずの大オルダのアフメトは，クリミヤの内訌に介入し，自身の身内であるジャニベクをクリミヤの汗位につけた[13)]。ヌル＝デウレットにすれば，一度は頼りとしたアフメトに裏切られたわけであり，その分，恨みは深いものがあった。

大オルダはアフメト汗の時代に，一時的に勢威をとりもどした。アフメトは，往時のキプチャク汗のように，ロシアを汗に貢納する従属国の地位にとどめおこうとするとともに，近隣のクリミヤに対しては，上記のごとく，汗位争いに介入するなどして自身の影響下におこうとした。このため，それに反発するロシアのイヴァン３世とクリミヤのメングリ＝ギレイ汗のあいだに対大オルダ同盟が結ばれることとなった。

このロシア＝クリミヤ同盟がさっそく功を奏したのが，有名な「ウグラの対陣」である。1480年，アフメト汗のひきいる大オルダ軍がロシア遠征にむかい，ウグラ川をはさんでロシア軍と対峙するかたちとなった。このとき，クリミヤのメングリ＝ギレイ汗はアフメトへの援軍の来着を妨げるなどしてイヴァン３世のロシアを支援し，ウグラ河畔からのアフメト軍の撤退をうながす一因とな

ったのである。

イヴァン３世とメングリ＝ギレイが接近するにあたり，ヌル＝デウレットは，触媒的な役割をはたした。1470年代末，弟メングリ＝ギレイとの汗位争いに敗れたヌル＝デウレットはリトアニアにのがれた。リトアニアは，ハジー＝ギレイによるクリミヤ汗国の建国を助けるなど，元来クリミヤと深い関係をもつ国であった。ヌル＝デウレットは，この父親以来のゆかりを頼りにしようとしたのである。

逆に，メングリ＝ギレイとすれば，兄がリトアニアからの支援を取り付けて，自分の汗位を脅かすのは何としても阻止しなければならない。とはいえ，直接リトアニアにのりこんでヌル＝デウレットをつれもどすわけにもいかなかった。ここで，メングリ＝ギレイが頼りとしたのが，いわば第三者的な立場にあったロシアの君主イヴァン３世であり，イヴァンにヌル＝デウレットをロシアに招致するよう要請した。これをうけ，イヴァン３世はキエフにいたヌル＝デウレットに対し，ロシアに来るよう厚遇をもって誘い，招致に成功する[14)]。

イヴァン３世からすれば，メングリ＝ギレイの要請にこたえることによってクリミヤに貸しを作ったわけである。のみならず，イヴァン３世にとっても，元クリミヤ汗という肩書をもつタタール人中の大物ヌル＝デウレットは奇貨であり，ロシアの対タタール政策にとって資するところが大であった。とくに，大オルダとの戦いにおいては，そうであった。

「ウグラの対陣」の翌1481年，大オルダは，アフメト汗がノガイ・タタール人などの急襲を受け敗死するという悲運にみまわれる。しかし，このダメージにもかかわらず，アフメトの遺児たちにひきいられた大オルダのタタール人勢力は，いまだ強力で，ロシア，クリミヤにとってあなどりがたい敵手であった[15)]。この大オルダとの戦いでロシア側の矢面に立って戦ったのがヌル＝デウレットである。ヌル＝デウレットは，自身がクリミヤを去る時に引き具してきた一族郎党にくわえ，カシモフ皇国の君主としてあらたに傘下に入れたカシモフのタタール人をひきいて，イヴァン３世の指示のもと，ロシアの盟邦であったクリミヤ汗国のタタール勢とともに大オルダと戦ったのである。

また，ヌル＝デウレットの存在は，クリミヤの君主メングリ＝ギレイに対する一種の牽制，外交的圧力の手段にもなっていた。かつてメングリ＝ギレイがイヴァン３世に対しリトアニアにいたヌル＝デウレットをロシアに招致するよう願ったように，ヌル＝デウレットは近隣勢力のいずれかから支援を得ればクリミヤの汗位への返り咲きを狙える人物であった。ロシアにおもむいてカシモフのタタール人を従えるようになったヌル＝デウレットはメングリ＝ギレイの君主の地位を脅かすには十分な存在であり，もしメングリ＝ギレイがロシアとの同盟を解消しようとすれば，イヴァン３世はヌル＝デウレットを推し立ててクリミヤの君主の交替を画せたのである。

カシモフにおけるクリミヤ系の王統は，四半世紀にわたってつづいた。1486年にカシモフ皇国の君主となってクリミヤ系の王朝のひらいたヌル＝デウレットは1490年に，おそらく健康上の理由によって，大オルダとの戦いの第一線から退いた[16)]。これをうけて，息子のサティルガンが父ヌル＝デウレットにかわって，カシモフの君主の地位につき，タタール人部隊を率いるようになる。サティルガンが1506年に没すると，彼の弟のジャナイが，カシモフの支配者となったが，1512年，継嗣を残さぬまま死亡する。これによってカシモフ皇国のクリミヤ系の王統の系譜は，父ヌル＝デウレットと彼の二人の息子，計３代をもって終わる。

その後，いかなるタタール人汗家の血を引く人物にカシモフの皇統を引き継がせるかが，ロシアの対タタール政策における重要課題として浮かび上がってくる。その際，この問題に対して，なみなみならぬ関心を寄せ，当事者として発言する権利を要求したタタール人勢力があった。クリミヤ汗国である。ハジー＝ギレイを祖とするクリミヤ汗国の君主一族の出であるヌル＝デウレットと彼の息子たちがカシモフの支配者の地位に就いていた以上，カシモフ皇国はクリミヤのユルト（領土）であり，同国の君主の地位にはクリミヤの汗家の一員がつくべきというのが，その言い分であった。しかし，ロシアは，このクリミヤの主張には耳を傾けようとはせず，クリミヤ汗家以外からカシモフ皇国の君主を迎えることになった。

３　大オルダの血統者

ロシアがカシモフ皇国のあたらしい王朝の開祖として白羽の矢を立てたのはシェイフ＝アウリアルなる人物であった。シェイフ＝アウリアルが，ジョチ＝ウルスの域内にあったタタール人国家の君主になるための必須の要件とみなされていたジョチの血統者であったのは当然であるが，そのなかでも大オルダの汗家につらなる血脈に属していたという点で，従来のカシモフ皇国の君主とは異なり，異彩を放つ存在であった。

大オルダの汗家のメンバーのなかでのシェイフ＝アウリアルの位置付けという点からすると，彼の父親であるバフチヤルについて，かの「ウグラの対陣」のアフメト汗の兄弟という説と，アフメトの息子であるという説がある[17]。前者ならば，バフチヤルの子供であるシェイフ＝アウリアルはアフメトの甥，後者ならば孫ということになろう。いずれにせよアフメトに近い縁者であって，問題は，どういういきさつで，このシェイフ＝アウリアルがカシモフ皇国の君主となったかである。

1502年，メングリ＝ギレイのクリミヤ汗国によって大オルダが攻め滅ぼされると，拠り所を失った汗家のメンバーたちは四散し，それぞれに自分の居場所を探すこととなった。これは，近隣の諸国にとっては辺境領域を危険にさらしかねない不安定要因であったが，それと同時に自国のために利用できるタタール人の貴顕を獲得できる機会でもあり，多くの大オルダ系の皇子が周辺諸国の君主のもとに迎え入れられた。

シェイフ＝アウリアルもそうした運命をたどった大オルダ系皇子の一人であって，ロシアの君主に仕える道を選んだ。彼は，扶持のための所領を在所に与えられ，自身はモスクワで暮らすようになった[18]。1512年にシェイフ＝アウリアルは，カシモフの君主の座にすえられる。彼はそれまで10年にわたり，モスクワにおいて，ロシアの君主のかたわらにあったのであり，その人物像を見さだめられたうえでの抜擢ということになろう。

ロシアに来た大オルダの血統者という点もさることながら，シェイフ＝アウ

リアルをとりまく縁者のなかでは，彼の妃も重要な意味をもっていた。シェイフ＝アウリアルはノガイ・タタールの公イブラヒムの娘シャギ＝サルタンを妻としてむかえ，彼女とのあいだに二人の息子をもうけた。1505年（ないしその翌年）に生まれたシャフ＝アリー，そしてシェイフ＝アウリアルが死亡した1516年に生まれた弟のヂャン＝アリーである。

シェイフ＝アウリアルの二人の息子が，ノガイ・タタールの有力者の血縁でもあったことは，後述のように，カシモフの君主がロシアの対カザン汗国政策の道具として利用されるようになると大きな意義をもつことになるであろう。けだし，西方のロシアと東方のノガイでヴォルガ川中流のカザンを挟み込む形勢となったからである。

1512年にカシモフの君主となり大オルダ系の王朝をひらいたシェイフ＝アウリアルは在位わずか4年で亡くなり，1516年，11歳の長男シャフ＝アリーがそのあとをついだ。そして，さっそく，このロシアの地で生まれ育った年少のタタール人君主の双肩にロシアの対カザン汗国政策の重責がのしかかることとなったのである。

おりしも，カザン汗国において汗のムハメッド＝エミンが1518年に死亡した。このムハメッド＝エミンの死によってカザンではウルク＝ムハンマドにはじまる汗家の血統が断絶し，あらたな血統の君主が必要という事態になる。また，ムハメッド＝エミンはロシアとクリミヤ汗国の双方の支持を受けてカザン汗国に君臨していた人物であり，彼の死を契機として，ロシアとクリミヤ汗国は，それまでの協調路線を解消し，それぞれが推す候補をカザンの汗の座にすわらせることによって，カザン汗国を自国の影響圏に引き込むのにしのぎを削るようになった。

ロシアとクリミヤがカザンの汗位をめぐって競合関係になったのを受け，カザン汗国内の有力者も親ロシア派と親クリミヤ派に分かれ勢力を競うようになる。こうしたなか，ロシア側の切り札として担ぎ出されたのが，カシモフの君主シャフ＝アリーであり，1519年，ロシアのツァーリの後押しによってカザンの汗位についた。

これに対して，クリミヤ汗国側は激しく反発し，自国の汗家のメンバーをカザンの汗位につけるべく策動してロシアに対抗した。はたして1521年にはクリミヤ汗ムハメッド＝ギレイの弟サギプ＝ギレイが，シャフ＝アリーにかわってカザンの汗となり，23年に彼がその地位をしりぞいた時は甥のサファ＝ギレイが君主の座を引き継いだ[19)]。サファ＝ギレイは1523～32年，1535～46年，1546～49年と短期の中断をはさみつつ３度にわたってカザンの汗となっている。すなわち，1520年代から40年代にかけてのほとんどの期間にわたりカザンでは，クリミヤ汗家出身の汗が君臨したのである。

クリミヤ汗家出身の汗たちのカザン統治におけるかくかくたる成果と比べると，大オルダ系のカシモフ汗家のメンバーであったシャフ＝アリーとヂャン＝アリーの兄弟のカザンにおける君主としての治績は，まことに精彩を欠くものとなった。

シャフ＝アリーは1519～21年にかけての最初の治世の後，1546年，1551～52年と２度にわたってカザンの汗位についている。合計で３度カザンの汗となった点では上記のサファ＝ギレイと同じであるが，シャフ＝アリーの場合，いずれの統治もごく短期で終わっており，カザンの支配者としての実績からするとサファ＝ギレイとは比べ物にならない[20)]。

また，シャフ＝アリーの弟のヂャン＝アリーについては，悲劇の色がいっそう濃く，ロシアの対カシモフ，対カザン政策に翻弄されるなかで短い生涯を終えることとなる。1519年に兄シャフ＝アリーがカザンの汗となってカシモフを去った後，ヂャン＝アリーは何もわからぬ幼子の身でカシモフ皇国の君主の座を引き継いだ。その後ヂャン＝アリーも，1532年に15歳で，親ロシア派が優位を占めるようになったカザンに汗として迎えられるが，その３年後には，親クリミヤ派が勢力を巻き返すなかで起きた反ロシア蜂起によって非業の死を遂げたのである。

かくして，カシモフの君主をカザンの汗位につけてカザン汗国をロシアの統制下に置こうとしたモスクワ側のもくろみは，思うにまかせぬままに終わる。傀儡の汗をつうじてカザン汗国を間接に支配するのが無理となると，つぎにと

られるべき手立ては一つ，ロシアの君主のもとでの直接統治である。1552年，ロシアのイヴァン４世はカザン汗国を征服，併合しロシアの領土の一部としたのであった。

おわりに

以上３章にわたってカシモフ皇国の君主の系統について見てきた。カシムにはじまるカザン汗国系，ヌル＝デウレットにはじまるクリミヤ汗国系，シェイフ＝アウリアルにはじまる大オルダ系の３つの皇統のなかで，前２者と後者を分ける最大の違いは「本国」，「母国」，あるいは深いゆかりのある「兄弟国」の有無であろう。

カザン汗国の始祖ウルク＝ムハンマドの皇子であったカシムにとり，カザンは「母国」であった。そのカシムが1450年代にカシモフ皇国を設立し，1469年ころに死亡するまで君臨する間，カザン汗国では，カシムの兄マフムードが20年にわたって君主の座にすわりつづけた。1445年に父ウルク＝ムハンマドにかわって汗となったマフムードは，父の代に誕生してまもない新興のカザン汗国の土台づくりをおこない事実上の創始者といってもよい役割をはたす。カザン汗国とカシモフ皇国は，マフムードとカシムの兄弟によってほぼ同じ時期に国のいしずえが築かれたタタール人国家であり，その点では「兄弟国家」と呼んでもよい性格をもっていた。

事情はクリミヤ系でも同じようなものである。ヌル＝デウレットはクリミヤ汗国の開祖ハジー＝ギレイの息子で，父の死後２代目の君主となった。その後，弟メングリ＝ギレイとの汗位争いに敗れてクリミヤを去り，カシモフの君主となったヌル＝デウレットにとり，クリミヤは母国であり，自分の弟が支配する「兄弟国」であった。

これに対して，大オルダ系のカシモフ君主は，1502年に大オルダがクリミヤのメングリ＝ギレイによって攻め滅ぼされた後に，流浪の身となってロシアに到来したシェイフ＝アウリアルにはじまっている。彼らにとっては，もはや本国と呼べるような場所は存在しなかったのである。

カザン系やクリミヤ系の支配者がカシモフ皇国に君臨していたころは，彼らの出身国であったカザン汗国，クリミヤ汗国が，それなりの存在感をもってロシアと対峙していた。こうしたなかカシモフの君主としての彼らは，母国とロシアとの仲介者となるとともに，ロシアのカザン，クリミヤに対する外交的圧力の手段として重要な役割をはたした。これに対し，大オルダ系のカシモフの支配者たちは，いわば寄る辺なき身の上で宗主国ロシアの君主と相対しなければならなかったのである。

シェイフ＝アウリアルの息子たち，シャフ＝アリーとヂャン＝アリーの兄弟の時代になると，大オルダ系にもあらたな「本国」を獲得する機会が訪れる。カザン汗国の汗位争いである。クリミヤのギレイ汗家のメンバーたちとカザンの汗位をめぐって競いうる候補としてロシアが推し立てたのがシャフ＝アリー，ヂャン＝アリー兄弟であった。もし彼らがクリミヤのライバルたちを抑え，カザンの君主として安定した地歩を築くことができていたら，ロシアの君主の臣下の一人としてカシモフの支配を託されているという身から脱皮して，ロシアの同盟国の君主になるという道も開けていたかもしれない。

しかし，結局のところ，これは実現せずに終わる。カザン汗国の始祖ウルク＝ムハンマドの仇敵であったクチュク＝ムハンマドの子孫という大オルダの血脈，さらにシャフ＝アリーにおいて特に顕著であった個人的な資質の問題により，大オルダ系のカシモフ君主シャフ＝アリー，ヂャン＝アリーの兄弟はカザンにおいて確固とした地盤を築けず，あらたな「本国」獲得の機会を生かせずに終わったのである。

注

1）ロシア史における「タタールのくびき」については，栗生沢猛夫『タタールのくびき　ロシア史におけるモンゴル支配の研究』（東京大学出版会，2007年），Charles J. Halperin, *Russia and the Golden Horde: The Mongol impact on medieval Russian history*,Indiana University Press, 1985 参照。

2）キプチャク汗のことをツァーリと称していたロシアでは，キプチャク汗国の分裂の過程で出現したタタール人諸国の君主も汗，ツァーリと呼ばれた，さらに周知のごとくツァー

リの語はロシアでは皇帝たる君主の称号となる。カシモフ皇国 Касимовское царство すなわち，カシモフ Касимов の皇帝＝ツァーリ царь が支配する国はまた，カシモフの汗 хан が支配するカシモフ汗国 Касимовское ханство であった。ただし，通常，汗＝ツァーリの息子を意味するスルタン＝ツァレーヴィチの語も，カシモフ皇国では君主の称号として使われた。

3）キプチャク汗としてのウルク＝ムハンマドについては，Ю.Почекаев .Цари ордынские. Биографии ханов и правителей Золотой Орды. СПб., 2012. с. 228-243参照。

4）カザン汗国の設立にかんしては，ウルク＝ムハンマドにより建国されたという通説以外に，彼の長男のマフムード（マフムーテク）こそが，その真の創始者であったとする説もある。

5）ウルク＝ムハンマドの血統者と彼らのロシアとのかかわりについては，А.Беляков. Чингисиды в России XV-XVII веков: просопографическое исследование. Рязань.2011, с. 53-57参照。

6）カシムとカシモフ皇国の設立については，拙稿「モスクワ大公ヴァシーリー２世とタタール皇子カシム」『関西大学文学論集』（65巻２号）2015年 参照。

7）この残酷な措置は大公位をめぐる争いで1436年にシェミャーカの兄のコソイを破ったヴァシーリー２世が，コソイを失明させたのに対する復讐であった。

8）カシモフ皇国における貴顕，平民などの諸身分の人間集団については，Б. Р. Рахимзянов, Касимовское ханство: 1445-1552 : очерки истории. Казань.2009. с.69-77参照。

9）キプチャク汗国の流れをくむタタール人の諸勢力のなかで，ノガイ・オルダのみは始祖エディゲイがチンギス汗の血統者でなかったため，彼の子孫たちは汗でなくベクとして支配者の地位についた。

10）ジョチの子孫たちによるジョチ・ウルス諸国の支配については，赤坂恒明『ジュチ裔諸政権史の研究』（風間書房，2005年）参照。

11）トゥカ・ティムルの血統者たちの系図については，Р.Ю.Почекаев. Цари ордынские. Биографии ханов и правителей Золотой Орды. 2-е изд. СПб., 2012. с.404参照。

12）クリミヤ汗国の内訌については，A. Fisher, *The Crimean Tatars*, Hoover Institution Press, 1978 pp.8-11参照。

13）大オルダのアフメトの介入については，В.Трепавлов. Большая Орда Тахт эли. Очерк истории. Тула, 2010. с.68-70参照。

14）Н. С. Борисов. Иван III. М., 2000. с.419.

15）アフメトの息子たちについては，В.Трепавлов. Большая Орда Тахт эли. с.76参照。

16）Б. Р. Рахимзянов, Касимовское ханство. с.123,128.

17）А.Беляков. Чингисиды в России XV-XVII веков. с.60.

18）Там же.

19）なおカザンの汗位をしりぞいたサギプ＝ギレイは，その後1533年から51年にかけてクリミヤの汗をつとめており，1530年代半ば以降，伯父サギプ＝ギレイのクリミヤ汗国と，甥

サファ＝ギレイのカザン汗国のタタール勢があい呼応して繰り返しロシアを襲撃するという事態となった（В. В. Каргалов. На степной границе.Оборона《крымской украины》Русского государства в первой половине XVI столетия . М.,1974.с.79）。

20）カザン汗国の支配者としてのシャフ＝アリーとサファ＝ギレイについては，拙稿「シャフ＝アリーとサファ＝ギレイ」『関西大学文学論集』文学部創設70周年記念特輯（44巻1-4号），1995年参照。